

で、

「一時凌ぎなのは分かっているの」

ブライ八さんは、ああ、と弱弱しい笑顔でうなずいた。午後はその中でも夜中はそうはいかなかった。

獣が吠えるような声と叫び声が出て、重たいものが落ちた音、あたしとそらがパジャマのまま手をつないで、部屋から吹き抜けホールに飛び出すと、ユリリとブライ八さんが手足をからませて倒れていて、ブライ八さんは真つ裸で手に万年筆がくくられて、ユリリはスリッパ一枚、かすかにうめく声が出て、鼻や口から血を出して、ブライ八さんの丸眼鏡がわきに転がってレンズが両方ともひび割れて、

あたしとそらがふたりに駆け寄ろうとすると、二階や三階の手摺から見下ろしてのおねえさんたちに「へたに触っちゃ、だめ」「骨折してるから」といわれ、

トミママがお相撲さんみたいな体に浴衣をはおって出てくると、昔のトミママにもどって、若いもんの人たちを指揮統率して、イチおじさんのところに走らせ、毛布を担架にしてひとりずつ乗せて、百花繚乱のおねえさんたちが常連上客になっている総合病院に運ばせ、丸眼鏡と白いサンダルを片づけさせ床にモップをかけさせて、おねえさんとお客さんを部屋にもどした。

吹き抜けホールは急に静かになって、
「坐らせておくれ」とトミママはあたしとそらの肩に

ほどで、

ある夜、自分の部屋にもどろうとして、トミママのおなががどうしても入口を通らなくて、入室禁止、吹き抜けホールの長椅子に永住生活、あたしとそらも強迫観念のラムネの日日がつづいた。

八月の暑い盛り、午後の百花繚乱はじつとり汗ばんで、お客さんも数えるほど、おねえさんたちはスリッパドレスでうちわをばたばた、かき氷やアイスや蜜豆や葛餅を食べながらのおしゃべりで、トミママは、袖なしのテント型ワンピースのすそをばたばた、小豆モナカを溶けないうちにと十個も口に放り込んで、
「冷たいねえー、頭の芯にくるよ」

頭を拳でこんこん叩き、食道のあたりをこすり、あたしたちはホームランバーをなめながら、ホームランが出るともう一本もらえる（このあいだはふたりともヒットだった）のが楽しみで、

玄関口がざわついて、チヨヨが大柄なミキミキを肩でささえてやってきた。ストリップの女王ジブシー・ローズに似た華やかなミキミキの顔が、日のふちや唇が切れて、鼻に詰めたちり紙が真つ赤にそまって、体まで縮んでしまったみたいで、

「どうしたんだい！」

トミママが声を張りあげた。

手をのせ、長椅子に坐ると、

「死ぬことはないよだから、安心おし」

あたしとそららはうなずきながら、ポケットに手を入れようとしたけれど、パジャマにポケットはなく、ラムネもなく、

「あたしの部屋から甘いもんをもってきておくれ」

頼まれて甘味菓子が入った箱や袋を取りにいき、ついでにあたしたちのラムネも持ってきた。

翌朝は、イチおじさんが指揮統率で、ユリリの部屋からブライ八さんの机や椅子や原稿用紙や薬の空瓶、ユリリの服や靴や毛布や本を運びだし、午後には新しいおねえさんが引つ越してきて、

イチおじさんの説明では、ブライ八さんは薬物中毒を治さなくちゃならないので別の病院に移って、ユリリは股関節のところを骨折しているから、ギプスで固定しての丸一カ月の入院生活、もう百花繚乱にはもどらないし、あたしたちのお見舞いも望んでないそうだ。

「あの子も三十過ぎだ。この商売にもどっても落ちてくだけだからね」

トミママはうなずいたが、
あたしとそらはラムネを暴飲暴食しそう。トミママだって、ユリリの事件のあとは、もつともつと、おまんじゅうや最中やどら焼きや羊羹やアンパンを食べるようになって、太って太って、部屋の出入りにもつかえる

「ミキミキの若いヒモよ」

「なんてこつたい。あたしのベッドに寝かしな。内臓がやられてないか診てもらうんだ。百花繚乱ならしつかり金が取れるから医者が飛んでくるよ」

ミキミキは腫れてふさがった目を開けよつとしながら、
「ビール瓶で殴ったから心配なの」

「当然だよ。おまえの殴られ方はひどいよ。まともじゃないね」

ミキミキの鼻に詰めたちり紙から、ぼとり、血が滴つて、ぼとり、ぼとり、くしゃくしゃの黄色いワンピースを汚し、

「あたしがヒモと話をつけるよ」

「そうしてやって」

チヨヨが新しいちり紙をミキミキの鼻にあてながら、
「ひとつ置いた隣の百一四花、二一八よ」といつて、ミキミキをトミママの部屋につれていく。

トミママは両腕を肩の高さまであげると、

「さあ、うみみとそららに手伝ってもらおうよ」

「まかしておいて」

あたしたちはそろって答えると、トミママの腕を片方ずつしっかり抱えて、立ち上がらせ、百花繚乱の玄関を出た。

何年も外に出なかったトミママは、すぐ目のまえに他のビルのあるのに驚き、光が射してくるビルの上

のほうを見上げて、あたしたちもつられて四角い空を見上げ、窓からゴミがばらばらと落ちてくるのに、急いで顔を伏せ、

「すごいもんになっちまったんだねえ」

トミママは驚きながらも、

隣りのビルに入って、店屋のならぶ廊下を店先の品物に体をぶつけて、ナスやキュウリやトマトやスイカを落とし、玉子を割って、竹輪やごぼう巻きを転がし、ドジョウの入ったバケツをひっくり返して、そのたびに、「請求はイチにしておくれ。トミママがそいつたどね」といつて歩いて、

非常扉をつないだ通路をとおって、隣りの百一四花までいき、トミママの幅くらしい階段を、あたしとそららに左右の巨大なお尻を押させながら、一段一段のぼり、やつとこさで二階に到着、

体でお商売するおねえさんたちが、ドアのまえに立ったり、椅子に坐ったりして、廊下を歩くお客さんに声を掛け、お客さんの冗談に笑っているのを、横目で見ながら部屋番号を確かめ、二一八号室をみつけた。

ドアが薄く開いてて、物音はなく、そららがもう少し開け、あたしがのぞくと、ベッドにミキミキの若いヒモ男とまだ少女時代の子が、染みだらけの夏掛けにくるまって眠り、

部屋は暴れまわったあとがありありで、隣りのビルの

壁しか見えない窓の花柄のカーテンが半分レールからはずれ、ひとつしかない椅子は主客転倒して、食べものも壊れた食器も割れたビール瓶も洋服も洗面器も石鹸も床に散乱状態、

「どんな関係か分かるよ」とトミママはあきれ、

「なんとしてもこの体を部屋に入れなくちゃならないね」

そららがドアを引っぱって全開にすると、トミママはドアに対して横向きになって、

「おまえたち、容赦せずに押すんだよ」

トミママは息を深く吸って、ほんのちよつとだけおなかをへこませて、蟹歩き、ドアにおなががかえるのは自然の法則、あたしとそららは一気呵成に押して、

「いたたたたあー」

トミママはドアの枠に擦られながら胴体がドアを通り抜け、肥満体形に比べて小さなサンダルの足が遅れて、もつれて前のめりになり、頭をうしろに倒してバランスを取ろうとして、

「なんだ？ と目を覚ましたふたりの上に、どっかん、と尻もちをついた。」

「ぎいえー」「ぎゃあー」と夏掛けの男女関係は叫び、トミママのお尻の下をまぬがれた手足をばたばたさせながら、トミママの体はびくともせず、若いヒモ男の顔を眺めて、

「貧相な男だねえ」

「どけ！ くそばばあ」

若いヒモ男はどなり、少女時代の子は細い体を蛇みたいにくねらせて、ベッドの端によって、肩を抜き胸を抜き腰を抜いて、ついに脱出成功、栄養失調みたいに骨が浮いた体に、床に落ちている下着と薄汚れたワンピースを拾って身につけると、閉めたドアのまえに立つあたしたちを、からまった前髪のあいだから睨みつけた。

トミママのお尻に敷かれたヒモ男はことばも貧相で、

「でぶばばあ、どけてんだよ！」

「お黙り。話ができないだろっ」

「うるせい！ ばばあ」

「うるさいのはおまえだよ」

「なんだと、くそばばあ」

トミママは「長くなりそうだから横にならしてもらおうよ」と丸太のような足をベッドにのせ、重量鉄骨みたいな上半身を勢いよく倒すと、

「ぎゃぎゅぎょえー」

若いヒモ男は悶絶絶叫、おとなしくなり、たぶん気を失ったのだ。

少女時代の子は怒った口調で、

「このばあさんはなんなの？」

「トミママよ。百花繚乱の中心人物」

「ミキミキの対策事業できたの」

「あんなたちは？」

「うみみとそらら」

「一卵性の双子姉妹よ」

「見たら分かるよ」

あたしたちは、一瞬、自己紹介をやめようと思ったけど、まあ、最後まで、

「三、四歳というところだね、のときに百花繚乱に捨てられて」

「十三、四歳というところだね、までになったの」

少女時代の子は「捨て子なのにきれいな格好してるんだ」とあたしたちを上から下まで眺めてから、

「あたしは三年まえだから、十一歳のとき捨てられたんだよ。かあさんは上の階の部屋を借りてただけど、家賃が払えなくなつて、階段の立ちんぼになった。お客さんと外にいくからつて、揚げたてのメンチカツとコロッケを買ってくれて、おかしいと思ったんだ。それからひとりやってる」

トミママはいたく感心して、

「えらいね。なまえはなんていうんだい」

「スミッコ。かあさんの商売中、階段のすみっこにしゃがんでたから、そう呼ばれた。捨てられてからも百花歓楽のすみっこで暮らしてたしね」

「そうかい、そうかい」

涙もろい年寄りになったトミママは鼻を詰まらせ、腹

も立つたみたいで、おながが、ぐぐぐー、と鳴って、

あたしとそらは、トミママにいわれてスミッコに安くておいしいパン屋に連れていってもらって、アンパンや鷲アンパン、三色パン、甘食、ジャムパンにクリームパンにピーナツコッペパンなんかを買占めて、みんなで飽食三昧、

トミママはミキミキの若いヒモ男の上に泊ることにして、スミッコは部屋のすみっこに夏掛けを敷いて、あたしとそらは百花繚乱に帰った。

翌朝、顔がボールみたいに腫れたミキミキとチヨヨといつしよに、二一八号室のドアを開けると、トミママの下にいたはずの若いヒモ男が仰向けで床に転がって、肘を曲げた形で両手を広げ、足はがにまたで、硬くなっていた。

ミキミキは若いヒモ男に駆けよって、

「あたしが殺したあー」と泣き出し、ひしゃげた鼻を指でなぞりながら、「ごめんね、殺すつもりはなかったの。ごめんね」

「違うよ」ベッドに横になったトミママが、

「あたしの体で圧死したんだ。スミッコに引っぱり出してもらったところだよ」

部屋のすみに坐ってるスミッコが、

「簡単だったよ」

「ひどい死に方」

ミキミキが若いヒモ男の大きく開いた唇をなぞりながらいうと、

「見事な圧死ね。うすべったく見えるもの」

チヨヨが、くくくつ、と笑ってから、

「こいつを片づけなくちゃならないわ」

「夏は腐るのが早いからね。ここでは死んだやつはどうするんだい？」

「どうするんだらう。ミキミキ、知ってる？」

ミキミキは、ヒモ男の怒ったように見開いた目を指先で閉じようとするが、できなくて、

「知るわけないわ」

「あんたの男でしょ」

ミキミキは無視だ。

「八工にたかられたネズミや猫や人間の赤ん坊も、女の人だって、ゴミ屋が片づけるんだよ」

スミッコは得意満面、もつれて固まった髪を耳にかけ、「隅田川のウナギの餌になるんだから」

あたしとそらは、すごい、と驚き、

「ウナギ、好物なのに……」

ミキミキはヒモ男の髪を指で梳きながら、食べれなくなる、と首を振り、

「スミッコはどうして知ってるの」チヨヨが訊くと、

「ゴミ屋を手伝ってた」

「いまも？」

「いまは体で稼ぐ」

「価格競争で負けるはずね。で、ゴミ屋とは連絡がつく？」

「おじいさんのゴミ屋と仲良しだよ」

「口は堅い？」

「耳が聞こえなくてしゃべれない。字が読めないし書けない」

「面倒な死体はそのじいさんに頼めばいいんだ」

チヨヨが喜ぶのに、ミキミキが紫色にふくれあがった唇で、

「きつと高いわ」

「それだけじゃないよ。死体で遊んでもいいって約束するの」

「そんなあー」ミキミキが嘆くのに、

「死んでるんだから。いいじゃない」

「おじいさん、男は嫌い。お尻はダメなの」

「生きてる女とやるのもダメなのよね」

チヨヨが訊くのに、スミッコはうなずいて、

「だから、安心してそばにいられたんだ」

「スミッコは賢いね」

トミママはスミッコがお気に入りみたいで、あたしたちは残念無念、そんなあたしたちの気持を逆なでするよつに、

「あたしは長くないからさ、あたしが死んだときに、じ

いさんに遊ばれるんじゃダメかね」

あたしとそらは叫んだ。

「死んじゃだめ！」

「絶対だめ！」

「食べて太って、血圧も危ない。心臓だって限界だ。自分で分かっているさ。うみもとそらのことは考えてるから大丈夫だよ。スミッコ、じいさんと呼んどいて」

「うん」

スミッコが部屋から走り出ていくのに、

「おまえたちもいくんだ」

トミママのことばに弾かれるみたいにあたしたちはスミッコを追いかけた。

「おじいさんはあちこちいくから急ぐよ」

あたしたちは必死でスミッコについていき、廊下を走り、非常扉をつないだ空中通路をわたり、階段を駆けのぼり、息を荒くしながら、

「紆余屈折ね」

「立体迷路ね」

「どのビルか分からない」

「何階か分からない」

スミッコが振り返って、

「上の階にいくと違うよ」

そのとおりだった。階段をなんどもあがっていくと、踊り場で部屋なしおねえさんが体のお商売の真つ最中で、

廊下に並ぶおねえさんたちも乳房をあらわにして両手でささえてみせたり、下着なしでスカートを持ちあげたり、スカートをまくってお尻を突き出したり、お客さんのまえに立って派手な長襦袢をはだけたり、お客さんをつかまえようと必死で、

お客さんも薄汚れたシャツとズボン姿で、値下交渉ばかり、歩きながらおねえさんたちの体を触ろうとして、「ただで触るんじゃないよ」と手を払われ、お客さんは、べつ、と唾を吐き、

廊下にはちぎれたビニール袋や紙くずや使用済み避妊具が捨ててあって、ハエがたかって、ゴキブリがもぞもぞ動いてて、あたしたちは足の甲のあたりがむず痒くなってきた。

おしつこの臭いのする廊下で、もう若くはないおねえさんが、パンツ一枚でしゃがんでいる幼い男の子に、経木に包まれたおむすびをひとつ握らせ、自分もひとつ取ると経木を廊下に放って、待ってたようにハエが飛んできて、経木にも、男の子のおむすびにも口のまわりにもハエはとまって、男の子の手で追い払いながらおむすびにかぶりつき、男の子の片方の目は目脂で閉じてて、そこにもハエが一匹とまっているんだけど、男の子は気づかない。

あたしとそらは男の子が気になって、振り返り振り返りしていると、酔っぱらって寝ている男の人の足にフンピースの上から体をなでさすり、トミママの足のあいだをつかんで、破顔一笑、

「チヨヨとミキミキを指さした。」

「スミッコが通訳して、」

「ふたりもだつて」

「どれだけ長生きするつもりよ」

「チヨヨが不機嫌にいうと、ミキミキがなだめるみたい

に、

「じいさんのほうが先に死ぬって」

「ミキミキの男は死んでもヒモなんだから、最低よ」

「ほんと最低だよ。あたしみたいな宿無しに売れ残りの

弁当ひとつでやらせるんだ」

「チヨヨもミキミキも唾然として、スミッコをみつめ、

うなずき、契約成立、

あたしたちは床に散らばっているたくさん物のなかから、包装紙の切れ端とちびたエンピツを探しだし、そらが文面作成して、あたしが口述筆記、

トミママとチヨヨとミキミキは、死体遺棄になったら、おじいさんに遊ばれる。でも、死体処理は頼まない。遊ばれるだけ。

三人になまえを書いてもらって、スミッコにわたし、スミッコは一字一字を指でさしながら読んで確認して（シタイイキとシタイシヨリの読みと意味はそらが説明）、おじいさんに身振り手振りすると、おじいさんは

まずきそうになり、男の人は乾いた吐瀉物に顔を突っ込んで、鼻をかいて、

「急いでよ」

スミッコに叱咤激励されて、

あたしたちは遅れないようスミッコの背中を追いかけ、こんどは階段をおりて、空中通路をいくつもわたって、やっと、

灰色の髪をてっぺんでお饅頭みたいにくくり、顔の半分がヒゲにおおわれたおじいさんが、黒っぽい作務衣姿でカゴをしょって、ゴミを探しながらこつちにやって来るのが見えた。

スミッコは走って、おじいさんに抱きつき、おじいさんのびっくりした顔が笑って、スミッコの背中をとんとんとたたき、

スミッコは身振り手振りで伝え、わたしたちを忘れたまま、おじいさんと全身全霊のおしゃべりで、廊下を歩き、階段をおり、あたしたちはふたりの背中を追跡調査、さっきの立体迷路は消えちゃったみたいに、すぐにミキミキの部屋についた。

スミッコが、トミママのベッドのまえで、トミママが死体遺棄になったら遊んでもいいので、代わりにヒモ男の死体処理をしてほしい、と再度説明すると、おじいさんはぎっしりゴミが詰まったカゴをおろし、トミママを見下ろし、爪やしわが真っ黒に汚れた手で、テント型ワ

紙を懐にしまって、

「引取料金は、一万円、現金払い、」

「明日払うといっておくれ。イチに払わせるよ。ひとり大儲けしてるんだから。あとで、うみみとそららにイチの事務所にもつてもらうからね」

トミママがきっぱりいって、スミッコの全身通訳に、おじいさんはうなずくと、

床に置いた背負いカゴをひっくり返し、大量のゴミを放り出してから、ヒモ男の硬直死体を引き寄せて、くると返して背中を上にと、腰に片足をのせ、腕と足をつかんで、

「ばっきん、と二つ折り、

「わっ！」「ええっ？」「チヨヨとミキミキがびっくりすると、

「背中とお尻がくっつく形じゃないとカゴに入らないんだよ」とスミッコが説明して、

おじいさんは、両腕を背中側に、ばきっ、ばきっ、膝も、ばきっ、ばきっ、と足先がお尻にくっつくように折り曲げて、

若いヒモ男は胸をそらした 字になって、

おじいさんはV字のヒモ男を持ちあげ、カゴに入れ、カゴから飛び出している顔に両方の手のひらをあて、首を、ばっきん、うしろに折って、V字のあいだに収め、床からミキミキの破けた服を拾ってかぶせ、しゃがん

で、カゴの肩紐に腕をとおして足の位置を確かめてから、一気に立ちあがり、腰のロープでカゴを補強するように体にくくりつけた。

おじいさんは、トミママ、チヨヨ、キキキキを指さして懐を三度たたくと、頭をさげて出ていった。

床はキキキキの散乱状態に、おじいさんのゴミが食べものの空袋空缶、履きつぶされたサンダル片方やすさまじい臭いの茶色のぼろぼろ運動靴、絡まった髪のかたまり、食器の破片、でこぼこのアルミのコップは取手がはずれて、洗って再利用する衛生用品、汚れきったぼろ布、錆び曲がった釘なんかで大きな山になって、悪臭芬芳、チヨヨが、

「トミママの部屋を掃除しなくちゃね」

そのことばによって、トミママの永住生活は、吹き抜けホールの長椅子からキキキキのベッドに変わったのだ。

イチおじさんの事務所は百一花の一階すべてを使って、百花歓楽の土建屋と不動産屋、あたしとそらは、他の部屋とは雲泥万里の社長室の黒い革張りの長椅子にらんで坐り、埋まりそうに毛足が長い絨毯に白いサンダルの足をおいて、うしろに大きなリボンがついた小花柄のワンピース、ポニーテールにも共布のリボン、白い小さなバスケットを膝において、

背広姿のイチおじさんと向かい合うと、トミママの遺

憾千万が分かって、

単刀直入、腹をわってイチおじさんに話すのは、まず、あたし、

「トミママとあたしとそらがいた百花繚乱のふた部屋と、百一四花の二階の四部屋を、交換条件してください。あと、死体遺棄するので一万円ください」

「あたしたち、十三、四歳というところだね、になって、そのまえだって、もう子どもではいられない人生でしたが、百花歓楽ですっかり大人になります」

「体のお商売じゃなくて」

「イチおじさんのヒモになるんです」

「あたしたち、ますますイチおじさんに似て、おかげで美人双子になって、感謝しています」

「だから、イチおじさんが寂しくつらいとき、あたしたち、ヒモになって慰めます」

「イチおじさんをしつかり働かせます」

「イチおじさんはあたしたちに入れ揚げます」

「今日は一万ずつでいいです」

「合計三万円です」

イチおじさんは、大笑いしつつ、あたしたちそっくりの大きな目はちっとも笑ってなくて、

「百花歓楽じゃ、俺をゆるするようなマツは処分するんだ」

イチおじさんの態度にあたしは切歯扼腕、

「いじわるね！」

そらは静かな闘志満満、

「死体愛好されて、隅田川のウナギになるんですよ。ウナギは隅田川の名物ね」

そらはトミママから教え込まれた天下無双の笑顔で、イチおじさんを見つめ、

「ウンチまみれで八工にたかられてる赤ん坊も、明日は解体処分されるの」

あたしも戦線復帰して、

「赤ん坊の、父は分からず、母は梅毒、戸籍なし」
にっこり笑う、

「おまえたちは、もう百一四花に移ってるんだな」

イチおじさんがあきれ顔で首を振るのに、

「あたしたち、誠心誠意のヒモになりますから」

「イチおじさんとは長いつき合いですから」

イチおじさんはやりとして、

「部屋の交換条件に損はないから三万円は立退き料だ。

ヒモの話は考えておく」

「大好き。とうさんのイチおじさん」

「ありがとう。とうさんかもしれないイチおじさん」

あたしたちはイチおじさんのほっぺたに両側からキスして、お礼をいった。

手に入れた百一四花の四つの部屋は、あたしたちとキキキキとスミッコで、ひと部屋ずつ、残りのひとつはチヨヨの知合いの若いおねえさんに貸して、家賃収入、

三日もすると、百花歓楽のおねえさんたちのあいだで、

トミママがキキキキの若いヒモ男とのごたごたを解消してくれた、と噂が広まり、どんなふうにかつたのかの犯行供述まで伝わって、朝から、おねえさんたちがアンパンや最中やおまんじゅうや今川焼きや飴団子なんかをもつてやって来て、

あたしたちがトミママを訪ねたときには、おねえさんたちが部屋いっぱい、身動きがとれず息苦しいほど、おねえさんたちは押し合いしながらベッドのトミママに近づくと、甘味菓子をトミママの口に押し込んで手を合わせるが、後ろから押されて、やめてよ、独り占めすんな、さっさと終えなよ、うるさくてお願いできないじゃないか、とケンカになって、叫び声とともにトミママの上に将棋倒しになり、

あたしとそららとスミッコは、必死でおねえさんたちを掻きだし、引っぱりだし、廊下にならばせ、待つてもらって、

「トミママ、大丈夫？」

「ケガしなかった？」

トミママは喉を上下させて、甘味菓子を飲み込んで、
「おまえたちで入場制限しておくれ、ひとりずつ順番だ。そのまえに、朝の体拭きだよ」

その日から、あたしとそららとスミッコは、おねえさんたちの機会均等で大忙し。スミッコは「これじゃ稼げ

ないよ。せつかく部屋ができたのに」と文句をいいながら、おねえさんたちを二列縦隊で廊下にならばせ、あたしは部屋の入ったところで三人のおねえさんに立つてもらい、そららがトミママのそばで、ひとりずつお参りするのに付き添って、

おねえさんは、トミママのそばに膝をついて、トミママの口に甘味菓子を入れて、ぶつぶつぶつぶつ、お願います、また甘味菓子を口に入れて、ぶつぶつぶつぶつ、どうか叶えてください、どうか、どうか、と祈願拝伏しながら、感情がたかぶって、泣き言、迷い言、恨み言、呪詛の言葉を吐きながら、大泣きしたり叫んだり、そららは興奮したおねえさんの背中をなで、肩をそつと抱いて、立ちあがらせて、

あたしはつきのおねえさんをトミママのまえに連れていき、おねえさんはトミママの口に甘味菓子を入れ……、誰が名づけたか、トミママ参り、と呼ばれ、大願成就ともいわれ、

トミママは、おねえさんたちの甘味菓子で、全身膨張、ベッドからはみ出てしまい、あたしたちとスミッコは、チヨヨとミキミキにも応援を頼んで、手足と頭をもつてベッドからもちあげ、イチおじさんの社長室からもらったきた毛足の長い高級絨毯の上のせようとして、トミママの重さに耐えきれず落としてしまったが、肉厚の体にケガはなく、トミママは絨毯いっぱい（長い毛足はべ

カゲを飼っている小さいトカゲ女がいて、再会がうれしく、でも、あたしとそらは小さい女芸人たちの倍近く背が高くなっているのが、恥かしく、拒絶されそうで、しゃがんであいさつすると、

小さい女芸人たちはまえと違って気さくに、「うみみとそらは大きくならなくちゃ生きていけなかったのよ」

「体の成長をとめた人生も難難辛苦よ」

「うみみとそららも体より気持が何倍も年取ってるから」

「たいへんよね」

みんなが慰めてくれて、あたしたちが、

「芸を観にいきたくないな」「劇場はどこなの」と訊くと、

四人は首を振り、

「もう芸人じゃないの」

「体のお商売よ。あたしたちサイズのお客さん相手にね」

「サイズが合っても男は男。勝手放題するわ」

「劣った体と見下すの」

小さい女芸人たちは、小さいため息をつき、

ほかにもスミッコの仲間の宿無し少女やスミッコをひと晩だけ泊めてくれたおねえさんなんかも来て、あたしたちは百花欝楽のおねえさんたちと親しくなっていく、そして、十月の初め。ドアを閉めてのトミママとあたしたちとスミッコの半時間の昼休み、おねえさんたちも

つしゃんこに横になって、

「のびのびできるよ」と満足顔で、

ベッドを廊下に出すと、順番待ちの列のなかから、屋上にテントを張って体のお商売をはじめたおねえさんが「願いがかなったわ」とマットレスをもちっていき、

中年双子姉妹のおねえさんたちが、ぼつてりした体に赤地に花が散った長襦袢に山吹色の伊達締姿で、「もうひとつベッドが欲しかったの」「くつつけてダブルベッドにするの」と鉄棒だけになったベッドをずるずる引っ張りながら、

「あたしたち夜鷹姉妹」「駒鳥姉妹より人気だったのよ」

「あたたたちならすぐに売れっ子になるわ」「あたしたちの若いころを思い出すわね」「百三十六花の二〇五号よ。遊びにいらつしゃいな」「双子姉妹の特技を伝授するわ」

ブルドックみたくに垂れた頬に厚化粧して、真つ赤な唇でにぎやかにしゃべっていった。

あたしとそらは、ありがとうございます、と礼儀正しく頭を下げながら、あの夜鷹姉妹があたしたちの前途有望だったなら、やっぱりヒモになろう、と決心した。

そんなこんなで、トミママ参りはますます話題になって、おねえさんたちが引きも切らずにやってきて、そのなかには、百花繚乱のなつかしいおねえさんたちもちらん、小さい女芸人たち、小さい蛇使いの女や小さい八つの乳房の女、小さい狼女、体の九つの穴に九匹のト

廊下に坐り込んで、ご飯を食べて、おしゃべりして、暴力沙汰のお客さんの情報交換して、トイレに行くのに順番をとってもらって、床に寝転んで昼寝のおねえさんもいて、

なにしてんだい！ 順番守りなよ！ うしろに並び

な！ とおねえさんたちの不平不満の声が聞こえるのに、あたしとそらがドアを開けると、目のまえに、浴衣のまえをはだけて胸からおなが丸見えで、浴衣を結わえている紐がお臍の上をとおって、

「やあああー」

ブライ八さんだ。ごま塩になったオールバックの髪をゆらして、顔の左側だけが笑い、

「こんにちは。三カ月振りかしら」

ユリリがブライ八さんの後ろから顔をだし、

「左足をまえに出して。あせつちゃだめよ」というのに合わせて、

ブライ八さんは左に傾いだ姿勢で、運動靴の左足を一步、つっぱった右足を床をこすりながら二歩目、交互に足をまえに出すが、体の右側は固まっているみたいなきき、

「痲癩起こすと倒れるわよ」

声をかけながら部屋に入ってきたユリリも、片足を引きずって銀色の杖をついて、足首までとどく黒いワンピースに、一本の長い三つ編みを背中にたらし、昔、ユ

リリが話してくれた物語の、アマゾン流域から裸の女の子をさらってきて、洋服とスペイン語と神を信じよ、で閉じ込めた尼僧みたいな格好、

あたしたちはアマゾン少女の物語が好きで、なんども話してもらった。大昔のギリシヤでは、アマゾンは弓をひきやすいよう片方の乳房を切り落とした、世界の果てに住む女戦士たちで、ユリリの物語では、アマゾンと呼ばれる女戦士たちが尼僧院から熱帯アマゾンの女の子を救いだして、

その後、女の子は熱帯密林の女戦士になって、吹き矢が武器なので両方の乳房そのままの裸で、両脇に双子姉妹の赤ん坊が抱きかかっているからみつけて、乳首をくわえて、戦闘のときは双子の赤ん坊だつて毒矢を放てるから、戦力増強、スペイン人やポルトガル人やアメ公とも戦つて大勝利、

だけど、話してくれたときのユリリは今は昔、四角四面の尼僧みたいな格好をして、黒い服に銀色の杖をこつこつ。でもやっぱり才色兼備の魅力はそのまま（よかつた）、あたしとそららに、

「切磋琢磨してる？」
「百戦錬磨よ」
「常住坐臥で」
「ふたりとも百点満点ね」

ユリリはほめてくれてから、床に横たわつてるトミマ

に責められたいお偉いさんがいてね、この杖で突いてやるの」

ユリリが、くふふふつ、と笑つと、
「かぁーんざあつだぁー」
「ブライハさん、百花歓楽を書くんですつて」
「おまえはブライハが致命傷だねえ」
「こんどは共同執筆よ」

「ところで、ブライハがさつきからあたしを靴の先でつづいてるのは、なぜなんだい？」
「作家魂ね。トミママはどんどん大きくなってるといふ噂だから、確かめにきたの。ほんと、部屋いっぱい迫力ね」

「足でつつかなくても、確かめようがあるだろう」
「作家は触つて確かめなきゃだめなのよ」
廊下で待つてるおねえさんがドアをたたいて、昼休みが終わつたのを伝え、ユリリとブライハさんは、また取材にくるわ、といって引きあげていった。

トミママがどんどん大きくなっているのは、あたしたちも気になっていたんだけど、

トミママはもう部屋の八割がたを占め、大きくなる度合いも日増しているから、部屋を広げなくちゃならない。二一八号室の両隣りの部屋を確保して、どうせペニヤ板一枚みたいな薄壁だからぶち抜くのはあたしたちでできるし、両隣りのおねえさんは、「これじゃあ、客が

マに、

「立つたままでごめんなさい。わたしは股関節に障害が残つて」

「気にしないよ」と顔が大きくなったトミママは、口がユリリの膝の高さくらいのところにあつて、
「ブライハさんは薬を断つたら右半身が動かなくなつちやつたの。お医者さんは精神的なものだつていうんだけど、ぴくりともしないの」

「そお、なあんだぁー」
ブライハさんの声は部屋中に響いて、部屋のすみ立つてるスミツコまで吹きだし、
「原稿依頼もなくなつて、家にもいられず、あたしのところに帰つてきたの」

「あぁー」
うなずいたブライハさんの顔は、右側は眉も目も頬も口も顎も硬直してるけど、左側は目尻も鼻の穴も口の端も笑つて、百花繚乱のときみたいにきーんと緊張してなくて、左手であたしとそららの頭をなで、左足はトミママの小山みたいな体をくいくいと押している。

「百五八花の十三階に住んでるのよ」
「ユリリはずいぶん安くなつたじゃないか」
「イチがあたしの荷物を突つ込んでおいたの。家賃が安い部屋に。それをそのまま使つて、イチの紹介で、貧しく汚いところで、女教師や修道女の格好をしたあたし

寄りつかないよ」と嘆いていたから、交換条件で別の部屋を用意すれば文句はないだろう。イチおじさんに頼まなくちゃ。

で、さっそく交渉にいくと、社長室で待たされたあげく、

「要求がエスカレートしていくな」
イチおじさんは不機嫌顔、
「へたなヒモでごめんなさい」
「憎らしいのに断れないよう、がんばります」

あたしとそららは、たくさん謝つて、努力を約束して、心を込めて舌先三寸、部屋がほしい理由を説明した。
イチおじさんも、おねえさんたちのトミママ参りがすごいのは知ってるはずだから、トミママが部屋いっぱいになつてお参りできなくなつたら、悲しみや怒りのやり場がなくなつたおねえさんたちは茫然自失、一度知つたものを失うのはもともと無かつたのとは大違いだから、百花歓楽は七転八倒の支離滅裂、イチおじさんの平穩無事にもかかわること……

イチおじさんはあたしたちに、
「うみみもそららもうまくなつたな」
と感心しつつ、これ以上つけあがらないよう嚴重注意してから、部屋を融通するといつてくれた。あたしたちはなんども、ありがとう、をいって、
そのくせ、あたしとそららは事情説明しつつ、テープ

ルのガラスの灰皿のわきに立っている、たいまつをもつ
た右手を高く掲げた女の人の白い像が気になって、四十
センチの女の人は威風堂堂、

「この人、誰なの？」

「なんていうなまえの人？」

「アメリカの自由の女神だ」

「どんなお話の人？」

「強い人？」

「建材屋からの貰いものさ」

イチおじさんが、自由の女神像のたいまつのところを
かばつと開けて、手首のあたりを親指でこすると、炎が
ついて、

「ライターさ。こけおどしだ」

「もらつてもいい？」

「イチおじさんのものを身近に置いておきたいの」

あたしはびつくりして、

「あたしたち、この女の人が気に入ったからでしょ」と
そららに訊いてしまい、

「ヒモがほしいものを手に入れるとき、そういうの」

イチおじさんはおもしろそうにあたしとそららを見比
べ、

「やるよ。いつもこの程度の要求にしてほしいもんだ
ね」

あたしたちはふたたび、ありがとう、と八方美人の笑

そのうえ、古株年増になつて家賃が払えなくなると追
い出され、立ちんぼでもお客がつかなくなると、ゴミ拾
い、若いおねえさんの仕事中に子どもをみて小銭をもら
つて、あとは廊下や階段にぼんやり坐つて、誰かがおむ
すびやパンの耳を握らせてくれることもあるけど、ゆっ
くり衰弱していくしかなくて、

だから、五、六歳というところだね、になると子ども
は自分で稼ぐ。商店の掃除を手伝つて、ゴミ拾いして、
おねえさんが体を洗う水を運んできて、酔っぱらつたお
客さんを知合いのおねえさんのところに連れてつて、お
客さんが泥酔すればお金も時計も靴も上着もズボンも
取つて……、ご飯やコッペパンや飴玉やせんべいやばら
売りの煙草一本を買つて、

百花歓楽の上階には子どもが増えて、赤ん坊や幼い子
が病氣になつて死んで、治つても脳や目や耳や手足に後
遺症が残つて、それでも、いつも笑い声がして、ゴミだ
らけの廊下で八工の死骸をご飯にしてのおままごと、ゴ
ム段遊び、かくれんぼしておねえさんの部屋に入り込ん
で叱られ、缶蹴りしてお客さんにぶつかつて叩かれ、悪
態をついて走り逃げ、十代になると階ごとにグループが
できてケンカも起こつて、不良仲間のリーダー格の少年
を、イチおじさんの若いもんの人たちが目をつけ使い走
りにして、少年たちは見たこともないイチおじさんにあ
こがれた。

顔になつて、ついでに一万円ずつ生活費ももらつて、キ
スして、ウインクして帰つた。

広くなつた部屋は、午前十時から午後九時まで両側の
ドアが開放されて、一度にふたりずつ、右と左から甘味
菓子やトミママの口に放り込んでの参拝祈願、一日に倍
のおねえさんたちがお参りするようになって、倍の甘味
菓子、数倍のトミママの膨張拡大、

百花歓楽のすべての大願成就がトミママのところによ
つてくるから、あたしとそららもたくさんのことを知る
ことになり、

おねえさんたちはお客さんやヒモによつて罵倒され
りケガさせられたり、お酒におぼれたり薬が手放せなく
なつたり、とつぜん部屋の窓から飛び降りたり睡眠薬を
大量に飲んだり手首を切つたりして、死んだり大ケガし
たりすつかり元気になつたり、ほんのたまに金貸しやド
ブロク作りや駄菓子屋をして小金を貯めておねえさん
もいたけれど、

多くのおねえさんは、なんども性病にかかつておしつ
このたびに苦しんだり、おなか痛くて駆けまわつたり、
おなかの赤ちゃんに困つて体温計や鏡のうらの水銀をな
めたり、おなかを叩いたり、針金を差し込んだりして、
赤ちゃんといつしよに死んだり、半死半生、産んでしま
うほうが得策というおねえさんもいて、体のお商売の部
屋に三人四人の子どもたち、

年が明けて、一月の夜遅く、あたしとそららのドアが
たたかれ、ユリリが呼ぶ声が出て、どうしてもトミママ
に会いたいの、と頼まれ、あたしたちはバジャマの上に
オーバーをはおつて隣の部屋のスミッコを起こし、
トミママの部屋に向かう。ユリリは黒い細身のコート
に銀色の杖をつきながら、母親らしい若いおねえさんは
あーあーと泣きながら首がかくんと垂れた赤ん坊を
抱いて、青い半纏を着たブライハさんは体を左右にぐく
んがくんと傾けながらついてきて、

スミッコがトミママの部屋の右側のドアを開け（左の
部屋は小さめでトミママの体でだいぶふさがつてしまつ
た）、あたしとそららとスミッコとユリリと死んでるみ
たいな赤ん坊を抱いて泣いてる母親の若いおねえさんと
ブライハさんが、つめつめで部屋に入つて、

あたしたちのほうに首をごろんと動かしたトミママに、
「遅い時間にごめんなさい」

ユリリは謝つてから、死んでるみたいなの赤ん坊を抱い
て泣いてる母親の若いおねえさんの背をおして、

「この子は、いつも赤ん坊を椅子に寝かして仕事するの
だけけど、仕事中に烈しく泣いたらしくて、お客が足で
椅子を蹴飛ばしたの。この子、耳が聞こえないから体に
乗つかった男が何をしたら分からなくて、赤ん坊は椅子
といつしよに床に転げて、お客は終わると知らん顔して
逃げたわ。この子が床から赤ん坊を抱きあげたときには

息がなかった。わたしたち、赤ん坊があんまり泣くと、預かりもしたんだけど……」

「あたしにどうしろっていうのさ」

トミママは眠くて面倒臭そうな声だ。

「この子、トミママが赤ん坊を生き返らせてくれるって信じてるのよ」

「むりだね」

「トミママからいわないと納得しないわ」

トミママは黙っている。

あたしたちも黙り、ああーああーとうめくように泣いている母親の若いおねえさんは、薄汚れた布につつんだ死んだ赤ん坊を、トミママの大きな顔の目のまえに差し出すと、

うっとうー、うああー、と喉を鳴らすようなかすれた声で訴えて、トミママの細い目をみつめ、

トミママは重い頭をころんころんと振って、

「むりなんだ」

ため息が蒸気みたい吹きあがり、

「あたしも潮時だね。もう死ぬよ」

突然のことばに、死んだ赤ん坊を差し出している母親の若いおねえさん以外は、そろってびっくりして、

「弱気になるなんて、トミママらしくないわ」

「弱気になるなんて、トミママらしくないわ」

「弱気になるなんて、トミママらしくないわ」

「弱気になるなんて、トミママらしくないわ」

「弱気になるなんて、トミママらしくないわ」

「弱気になるなんて、トミママらしくないわ」

「弱気になるなんて、トミママらしくないわ」

「弱気になるなんて、トミママらしくないわ」

「弱気になるなんて、トミママらしくないわ」

「弱気になるなんて、トミママらしくないわ」

「弱気になるなんて、トミママらしくないわ」

め、だめだめ、だめだから、そんなのイヤよ、イヤ、とうわごとみたいにくり返し、スミッコは肩をすくめ、

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

「おーもしいるい、はあーなし、にいなるぞおー」

ミママ参りは、足のあいだに賣錢を　甘味菓子は無用』と張り紙して、あとは待つだけ、

まだ、おねえさんたちはやって来ない。あたしたちはドアのまえに立って手持ちぶさたで、気持も落ち着かなくて、どうしよう？　トミママの足のあいだの洞窟祠をながめて、思いついた。

トミママが死んで新しいトミママ参りになったことを廊下や階段や空中通路を歩いて知らせなくちゃ。

もう一枚、張り紙を書いて、スミッコにわたし、あたしたちは目印になるものがほしくて、自由の女神像を交代で掲げることにした。

あたしとそらは自由の女神みたいに胸を張って、威風堂堂、まっすぐ前途遠遠をみつめて歩き、スミッコがすくうしろを、『トミママ参りは、足のあいだに賣錢を　甘味菓子は無用』と廊下のおねえさんたちに見せながら歩き、

ドアのまえで体のお商売をはじめたおねえさんたちが、「トミママが死んだんだね」「あたしたちの代わりにだね」「参列するよ」「いっしょに歩くとあたしたちについて歩きだし、朝寝坊してたおねえさんたちも部屋から出てきて、泊まりのお客さんがいるおねえさんたちも手早くすませて、

トミママは死んでも千年万年、トミママ参りは未来永劫の告知の列は長くなって、廊下、階段、空中通路を進

大願成就だ

ちよちよんが、ちよん

おねえさんたちは歌いながら振りまでつけて、列に加わったおねえさんたちもすぐに覚えて、歌声は強く大きくなって、怒りははらんで渦巻いて、沸き立って、

「うみもとそら、もう十分だ。やめろ！」

イチおじさんの若いもんの人たちが、突然、あたしたちの数メートルまえに現れて、行列を止めようとして、そう苦くないひとりがまえに出て、

「ふたりが拾われたときから知ってるよ。手荒なことはしたくない」

「覚えてる。マツちゃん、十六歳だって自己紹介してくれた」

「十一歳で浮浪児になったって教えてくれた」

「だったら、俺の顔をたてて、やめてくれよ」

「もう、止らないの」

「誰も、止められないの」

あたしとそららとスミッコは歩きつづけ、おねえさんたちも歩きつづけ、

「解散だ！　痛いめに遭いたくなかったら、すぐに部屋にもどれ！」

古株マツちゃんが、怒鳴ると、若いもんの人たちが棍棒を振りあげ、今にも襲いかかるうとして、おねえさん

み、どんどんどんどん、おねえさんたちが加わり、子どもたちが走りまわり、店からお客さんや店員が廊下に出てきて見物して、たくさんの息と声と体臭と気持があふれ出し、ひとりのおねえさんが歌いだした。

「落ちてくよ　　つたら、落ちてくよ
十四階から、飛び降りて」

別のおねえさんがつづけて、
「落ちてくよ　　つたら、落ちてくよ
あたしの値段、この体」

いろんな声が重なって、歌ができていって、手拍子が起こって、「落ちてくよ」がくり返され、おもしろい歌じゃないか、覚えやすいねえ、あたしたちにどんぴしゃだよ、と自画自賛の拍手喝采、調子を合わせてみんなが歌う。

落ちてくよ　　つたら、落ちてくよ

十四階から、飛び降りて

落ちてくよ　　つたら、落ちてくよ

あたしの値段、この体

落ちるにまかせて

ちよちよんが、ちよん

ちよん　ちよん　ちよん

誰がいったか

トミママ参り

たちの歌声が小さくなって消えていき、足がとまり「やばいよ」とざわつき始め、おねえさんたちは他力本願、

あたしたちも立ちどまり、

そららが、あたしが握ってる自由の女神のたいまつのところを開けて、親指で、白い手首を力チツとこすると、赤い炎、

あたしは自由の女神をもっと高く掲げて、最近のそらはこんなときには才気煥発、スミッコに「貸して」とトミママ参りの張り紙を借りると、筒状にして、

「百花歓楽で火事が起こったら、すべておしまいです」

そららはマツちゃんにおだやかに話しかけ、筒のさきを自由の女神の炎に近づけ、

「だから、火遊びしている子がいたら、大人は気を失うほど殴って教えます」

「脅すつもりか」

マツちゃんがいうのに、「違います」とそららは首を振り、

あたしはそららが何を考えているか理解してるから、「あたしとそららは、トミママが死んで悲しいけど、完全無欠のトミママ参りになったのが嬉しくて、百花歓楽に知らせるだけなの」

「たった一日のトミママ行列、それが許されないなら、あたしたち、何もないと同じです」

「燃えても、失わない」

「最初から、ないから」

「捨てられたときみたいに」

「拾われたときみたいに」

おねえさんたちが大きな声で歌い出した。さつきより、
どすが利いた声が重なって、

落ちてくよ 　　つたら、落ちてくよ

十四階から、飛び降りて

落ちてくよ 　　つたら、落ちてくよ、あたしの値段……、
歌はずっとまえのほうからも聞こえて、イチおじさん
のところの若いもんの人たちは振り向くと、棍棒をおろ
すしかなくて、あたしやそららのまえをおねえさんたち
が背中をみせて歩いていく、

落ちるにまかせて

ちよちよんが、ちよん

ちよん 　　ちよん 　　ちよん

誰がいったか トミママ参り 大願成就だ……、

チヨヨやミキミキが振り返って手をあげて、ユリリや

ブライハさんも、小さい女芸人たちもいて、あたしとそ
らは自由の女神をできるだけ高く掲げ、

もつ、先頭も後尾もなく、おねえさんたちは怒鳴る

ように叫ぶように、歌いつづけ、

落ちてく音頭だ、

ちよちよんが、ちよん、

トミママ行列は、歌いながら、ゴミを蹴散らし、見物

してるお客さんからコップ酒をせしめ、店先からパンの
耳、昨夜の残り弁当やコロッケをせしめ、百花歓楽のす
みずみを歩き踊りまわり、

偶然みたいにトミママのドアのまえを通るときには、
柏手を打って、拝み、一円玉、五円玉、大奮発で十円玉
をトミママの足のあいだの祠に向かって、投げ、まんな
かに命中すると、病気も移らず、いい客もつき、まとも
なヒモもみつかると言い出して、御利益の話は行列のお
ねえさんたちに波のように伝わり、

そりゃあ、いいねえ、すっかり狙わなくちゃね、百発
百中しなきゃ、稼ぎを賣銭につき込むわけにはいかない
からね、あなたなら手前に落ちてる賣銭を拾って投げそ
うだ、当たりや御利益だもん、そりゃいいねえ、その賣
銭の持ち主にね、と笑い合って、

落ちてくよ 　　つたら、落ちてくよ……、の歌声まで、
笑いを含んで、

あたしとそらは行列のまんなかで、

百花歓楽で暮らすと決めた。拾われたんじゃない。